

アメリカ科のつづれおり

第20期 能登路 雅子（1972 卒業）

最近、BS テレビの深夜放送でキャロル・キングがロンドンで2016年の夏に行なったライブの録画を偶然に見た。往年の名アルバム『Tapestry』の全曲をピアノの弾き語りで演奏したキャロルは、74歳にして元気滄刺。人生に対するパッションにあふれていた。夕闇せまるハイパークを埋め尽くした6万5千の聴衆は50年ちかくタイムスリップして、まるで自分の青春を愛おしむかのようにおなじみの歌詞を口ずさみ、体を揺らせた。

ロック・ポップス史に輝くこのアルバムは1971年2月に発売されたというから、私がちょうど駒場のアメリカ科にいたころのことだ。このレコードも擦り切れるほど聴いたが、当時の私は混迷するアメリカに幻滅を感じつつ、サリンジャーを読んだり、ニューシネマに夢中になっていた。我々20期生は学部に入學して間もなく全学無期限ストが始まり、その後も落ち着きのないキャンパスにあって、最も勉強をしなかった世代といえるだろう。

アメリカ科は学生が使える研究室も溜まり場もなく、すぐ下の学年も入試が中止になったために進学してくる者もなく、同期のあいだの結束もあまり強くはなかった。それでも中屋健一先生のアメリカ史の厳しい授業をなんとか生き延びたあと、ふだんの授業のほかに亀井俊介先生のアメリカ文学合宿を楽しんだり、フルブライト交換教授で「アメリカ現代思潮」を担当されたロバート・スクラー先生に連れられて京橋のフィルムセンターでアメリカ映画の名作を見たりと、教養学科の自由な空気を味わっていた。非常勤講師として出講しておられた猿谷要先生によるアメリカの人種マイノリティについての授業も刺激的で、卒論のテーマに黒人、アジア系、先住アメリカ人などを選んだ学生が多かった。

20期生は、アメリカ科草創期よりリーダー格でいらした中屋先生の駒場最後の年に進学し、亀井先生が主任となられて初めての内定生だった。そのせいか、卒業後ずっと音信不通だった同期生たちがそろそろ定年という2010年ごろになって、亀井先生を囲む会をときどき開くようになった。80歳をすぎても執筆の勢いが一向におとろえない先生は昨年、『日本近代詩の成立』（南雲堂）で日本詩人クラブ詩界賞を受賞された。そのお祝いを兼ねた同期会では、570ページにおよぶ分厚い研究書を読破したうえで臨んだ仲間が複数いたが、アメリカ科在学時代に満たされることがなかった知的渴望感がいまになって一気に燃え上がったという感がある。

駒場で青春をともにすごした多彩な仲間との横の関係もさることながら、アメリカ科の特徴は縦の絆の強さだろう。1953年卒業の1期から昨年卒業したばかりの65期生までが同窓会の定例総会に顔を出すというのは、東大広しといえども、なかなか例がないのではないかな。毎年、最優秀の卒業論文に同窓会から

賞を出すというのも、アメリカ科の知的伝統を世代を超えてつないでいくのに一役買っていると思われる。

私は卒業後、東京にある外資系広告代理店勤務を経て、しばらく海外で暮らし、UCLAの大学院で学んだが、助手としてアメリカ科に戻ってきた1980年代はじめごろは、本間長世先生が名学部長として活躍しておられた。銀杏並木のそばの本間研究室の一部を学生に開放するという形でアメリカ科の学生の交流の場ができていて、32期から34期生あたりの現役生が毎日にぎやかに集まっていた。そのころの卒業記念パーティには中屋先生がお出かけになることがあり、新卒業生を温かく激励してくださった。

かつてのアメリカ史の授業では、怖いという印象のみが強烈だったが、それから10年後にお会いした中屋先生はまるで別人のような優しい面を見せてくださり、卒業生たちとの勉強会を銀座で開いたり、アメリカ科の教員や卒業生を総動員してN. ピアス、J. ハグストロム著『ザ・ブック・オブ・アメリカ』（実業之日本社、1985年）というアメリカ50州の歴史と現状を分析した大著の翻訳プロジェクトの指揮をとられた。私はそのなかで、多少はなじみのある南カリフォルニアとアリゾナ州の章を担当させていただいた。

ある年、中屋先生の成蹊大学の教え子の方たちと一緒に夏の妙高で合宿をしたことがあったが、夜は先生の細かいご指示のもとで私たちが中華料理をつくった。食後には先生の若き日の南米での冒険談とともに、高木八尺先生がハーバードでフレデリック・ジャクソン・ターナーと会われたときのことなど、日本のアメリカ研究のパイオニア時代の貴重なエピソードをうかがった。

話はここで2018年の現在に飛ぶが、数週間前の2月はじめ、その高木先生が眠っておられる青山墓地を訪問する機会にめぐまれたが、それもアメリカ科の縦の糸がたぐりよせてくれたものだったと思う。アメリカ科揺籃期に文化人類学を教えておられたアメリカ人のゴードン・ボールズ教授について、日米知的関係の文脈でこのところ関心をいただいているが、一昨年と同窓会役員会で2期生の伊原総三郎氏と3期の伊木常昭氏にお尋ねしたところ、2期の明石康氏がボールズ教授とその後も交流をもたれ、日本にある墓地にお参りしておられることを教えていただいた。

このようなことが、その後の思わぬ巡りあわせにつながって、ニューヨーク駐在以来、明石氏と親しくしておられる10期の久保田誠一氏のご配慮により、ボールズ教授のお墓参りに同行させていただくことになった。そして、明石氏と久保田氏のみならず、アメリカ科初期に学生を指導された松本重治先生のご子息でアメリカ科大学院に学ばれた松本健氏もご一緒され、同じ青山墓地にある高木先生のお墓と松本先生の墓地跡も訪れることができた。生前にお会いすることのなかったアメリカ科の大恩人たちの墓参りをアメリカ科の先輩方とご一緒することで、神代の昔に属するレジェンドがにわかになりに感じられた。

この墓参りの少し前、51期生の竹内愛子さんがブックトークを中央大学と駒場で行なうという画期的なできごとがあり、ブラウン大学に提出した博士論文をもとにした出版の内容について、私も若手研究者たちと一緒に活発な議論に加

わった。近年はさまざまな会合で、アメリカ科卒業生の奮闘ぶりを耳にすることが多くなった。駒場で指導をした学部生や院生たちが、それぞれ羽ばたいて素晴らしい活躍をしているのを見るのはこのうえなく嬉しいことだ。

色彩も個性も豊かな教授陣や卒業生たちが織りなすアメリカ科のつづれおりは、縦にも横にも、過去に向かっても未来に向かっても広がりつづける感じがしている。10年後、20年後、そこにどんな新しい糸が加わって、どんな模様が浮びあがるかを想像するのも、また楽しい。